慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	市村真一著 世界のなかの日本経済
Sub Title	
Author	大山, 道広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.2 (1966. 2) ,p.214(104)-
JaLC DOI	10.14991/001.19660201-0104
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660201-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

市村真一著『世界のなかの日本経済』

本書は、いくつかの雑誌・新聞にすでに掲載された諸論文に加筆修正してでき上ったものである。しかし、全体として「世界のなかの日本経済」という書題の含蓄にふさわしい内容となっているのは流石である。「現代に至る世界と日本の環境の変化を冷静に分析し、その未来を展望し、その中で公正なる理想実現の道を探求する」という著者の意図は、学者的良心と明晰な頭脳に支えられた手がたい論述のなかに十分に生かされて、容易に得がたい好著となっている。

序章では、極東（Far East）にして極西（Far West）の国、日本をテーマにその経済の国際的地位を、領土、人口、国民所得、生活水準などの指標によって丹念に位置づけ、進んで、戦前・戦後の高度成長の姿を跡づけるとともに、その要因に説き及んでいる。特に興味深いのは、「潜在的長期趨勢線」の概念を導入して、戦後における日本経済の成長力を推定している点である。これは、日本経済の将来に対する著者のヴィジョンのコーナー・ストーンともいうべきもので、のちに第五章でも重要な役割を演ずる。

第一章では、経済成長の基本問題として、成長論の課題、発展のメカニズム、人口問題、成長率、産業構造の変遷、外国貿易と海外投資、更には教育問題などを犀利な筆で論じている。第二章は「ヨーロッパ経済」と題して、世界経済七不思議の一つともいうべき日独経済の戦後における目覚ましい成長ぶりをとらえ、規模と水準、復興速度、資本蓄積、輸出と海外投資、労働力不足と物価上昇などの観点から両国経済の比較を行なったのち、R・C・ギアリイ編「数字でみるヨーロッパの将来」などに依拠しつつ、ヨーロッパ経済の将来を占なっている。

一転して第三章の主題は東西問題と南北問題である。ここでは、まずヨーロッパの凋落と米ソの抬頭にともなう東西問題の発生から筆を起し、共産圏と自由世界の経済力の比較、成長競争の行方を問題にしている。次いで、東西問題とならんで近年とみに重大化しつつある南北問題をとり上げ、これに多彩で、しかもコムパクトな解説を与えている。第四章は、世界経済の課題として人口問題と富裕社会の問題を指摘し、これらの解決のため新しい世界秩序の形成を希求する内容となっている。最後に第六章では、ふたたび日本経済の考察に回帰し、高度成長の要因、転型期論の問題点を究明したのち、投資構造の変化、産業構造の変化を論じ、更に国民経済と私企業経営（マクロとミクロ）、労働力不足と農業問題、そして富裕化にともなう問題など特に重要と目されるトピックスに検討を加えている。題して「日本経済の現状と将来」である。

紙幅の制約上その内容を伝えることはできないが、以上六つの章がいずれも豊富かつ適切な統計資料（あわせて五二の表と一四の図）によってちりばめられていることが本書の最大の特徴である。創見にはやや乏しいとしても、全章を通じてオーソドックスでバランスのとれたエコノミストの神経が行きとどき、著書の自負がうかがえ、肯なえるエッセイ集である。（中公新書・一九四頁・二〇〇円）

—大山道広—

＊　＊　＊

山鹿誠次編『都市発展の理論』

「現代は都市化の時代といわれ、都市の発展はまことにめざましい。本書はこのような都市発展の構造とその基本要因を明らかにし、学術上ならびに実社会に対し新しい理論を提供しようとするものである」と本書の冒頭に掲げてある。いうまでもなく、現代の都市は歴史的産物であり、従来その歴史的発展についての記述はかなり多数存在するが、その機能ないし構造の解明ということになると研究は必ずしも多くなく、現代都市の動向を考察する上で一つのギャップがあった。こうしたギャップを意識し、かつ、都市の複雑な機能を考慮した上で、経済学的アプローチと地理学的アプローチを併用することによって新たな研究方法をつくりだそうというのが本書の主要な意図であったのであろう。この意味で、本書には従来なかったフレッシュな意気ごみというものが感ぜられる。第一章から第三章までは理論の部ともいうべきもの、即ち、第一章の都市発展の立地経済論（金田）は我国に於ける少壮の立地論者による矢張同世代のアロンゾの都市の立地論の紹介、第二章都市発展の理論モデル（斎藤）は都市に関する所得決定のモデルを野心的にまとめあげ、更に第三章都市発展と地域構造（山鹿）は人間生態学、地理学に於て過去三〇年にわたって提出され、既に確立された都市構造に関する理念型を手がたく紹介している。これに対して第四章以下は実証の部ともいうべきものである。第四章工業立地と都市発展（高羽）は economic base, 工業立地の地域開発効果、更に都市集積を論じ、必ずしもその論旨が明確でないが、都市発展の類型として提出された理念型はかなり独自のものであり興味をひく。問題はこの類型を規定するのに都市化と工業化という二元的接近を試みたことであり、これが単なる相関分析の対象として提出されたものであるならば、既により多数の変数を扱える因子分析の技法が開発されており、その都市への適用も行われている現状から云って、必ずしも当を得たものではないのは明らかであろう。むしろ、この場合、都市の基本的機能を統御を含むコミュニケーション活動にあるとみて、これを工業化と比較することによって、一つの都市発展の仮説を大胆に提供すべきであったように思われる。

第五章商業の発展と都市化（服部）は、都市規模と都市圏に関する模式図を中心に、各レヴェルでの商業機能を説明したものであるが、筆者の豊富なフィールドワークの経験をこのように限定された紙数の中にもりこむのは稍無理があり、この点が惜しまれる。第六章住宅の発展と都市化（青木）は伝統的な地理学的接近を試みたものであり、この点、第七章交通の発達と都市化（青木）も同様であるが、これらはともに伝統的な記述的態度が明確な問題意識をもって動機づけられる限り、非常に有効な調査結果を導き得るものだという一つの例証でもある。第八章都市発展の類型（服部）は、基本的には二つの内容から成っている。即ち、不動産増加率と金融業増加率との相関図から近郊都市と地方都市とを類型化することと、従業者率と第二次産業従業員率との相関図から住宅都市と業務都市とを類型化することの二つである。ここで用いられた方法がダンカンの言う仮設導出のための回帰分析のカテゴリーに入るのは興味あることであるが、それはともあれ、われわれのもとめる都市発展に関する法則は、こうした地味な研究の積み重ねによるものだということを認識すべきであろう。